

(様式第1号)

平成22年度 第1回 芦屋市公民館運営審議会 会議録

日時	平成22年8月26日(木)
場所	市民センター204室
出席者	委員長 川村 照子 委員 笠原 清次 小柴 明子 西本 佳子 信岡 利英 藤田 まさ代 事務局 公民館長 浅野 裕司 ・ 公民館長補佐 長岡 一美 指導主事 松本 かづみ ・ 主事 中西 恭三
欠席者	委員 本玉 元 社会教育部長 橋本 達弘
会議の公表	<input checked="" type="checkbox"/> 公開 <input type="checkbox"/> 非公開 <input type="checkbox"/> 部分公開 <非公開・部分公開とした場合の理由>
傍聴者数	0人

1 会議次第

(1) 挨拶

(2) 議題

- ① 平成22年度 春の公民館講座等の実施結果について
- ② 平成22年度 秋の公民館講座等の実施について
- ③ その他
ア 市民センター大規模改修工事を終えて
イ 指定管理者制度について
- ④ 次回 第2回公民館運営審議会の日程について

2 提出資料

- 資料1 平成22年度 春・夏の公民館講座等の実施結果について
資料2 検討事項の参考資料
資料3 秋の公民館講座特集

3 懇話内容

< 開会 >

河村委員長あいさつ
浅野公民館長あいさつ
事務局より配布資料の確認、説明

(川村委員長)

早速、議題の方に移ります。まず、報告の方、お願いします。

< 事務局より説明 >

(川村委員長)

報告をいただきましたが、ご意見があったら伺いたいです。芦屋川カレッジのことから話しましょう。

(信岡委員)

芦屋川カレッジの学友会でも話題にもなっていることですが、60 歳以上の高齢者というのが実はひとくくりではなくて、団塊の世代とその前の高齢者とかなり違ってきているのではないかというのが実感です。同じお年寄りのグループでも、話が時々噛み合わないときがあります。学友会の委員会の中でも、これは、やはり、考え方が違うのではないかというようなことが、話題になります。

もう一つは、受講料との関係です。受講料との兼ね合いというか、いわゆる、他の市町村、自治体の同類の市民講座、高齢者生涯学習の講座との比較を、皆さん、よくなさっていらっしゃるようです。私たちの年代ではそういうゆとりはなくて、ただ、芦屋市の芦屋川カレッジということで、他にはなかなか目が行きませんでした。ところが、最近の 5、6 年の 60 歳以上の人たちは、よく、他との比較をしています。受講料とカリキュラムとの密度の濃い薄いというのを、よく見ているのではないかなと学友会でも話題になっています。カリキュラムの充実というのは、最大のポイントですが、受講料が数年ポンポンと値上がりし、私たち 15 期が、2、3 千円で受講料を過ごしてきた時期から比べると格段の違いがあります。けれども、カリキュラムが充実していれば、それなりの満足度はあるのですが、どうも、他所と比較してという傾向はあるようです。

大学院にいたっては、セカンドカレッジのときは、芦屋川カレッジの一年間ではどうも充足感のなかったところを、もう一年勉強してやってみようかという雰囲気がつながっていました。ところが、大学院となると、芦屋川カレッジではどうも物足りない、まだ、不満足だという人たちにも、別の物に写っているのです。いわゆる、同期会を結成するなどということもあって、芦屋川カレッジの方が面白い。だから、もう一つ、大学院に対する評価が盛り上がってこないのではないですか。これも、最終的には、カリキュラムが関わってくると思います。藤原教育長からもお尋ねがあって、「どうしてだろう」と、教育長自身も疑問に思っているんじゃないかと思いますが、去年は、公民館のリフォームの関係がイレギュラーで、12ヵ月間の受講が6ヵ月間に減るということもあって、募集したときのちぐはぐもあったのですが、今年は、そんなこともないので、今年の少なさはどうしてだろうと、私たちも首を傾げています。60 歳以上の団塊の世代は、やはり考え方が違うのではないかと、そういうことを、古い人たちは言っています。

(川村委員長)

カリキュラムと受講料の関係ということが難しいですね。

(信岡委員)

以前は、例えば西宮とか神戸でやっていることや、放送大学とかそういった類のものと、比較するような目はあまりなかったのですが、このごろよく比較しています。その辺に何か不満足なものがあるのかなという感じはします。

それと、古い人たちは、自主的に活動した人が多いのです。例えば、「20 世紀を語り継ぐ」という雑誌を出したり、「芦屋のお地蔵さん」という冊子を出したり、あるいは、「芦屋の散歩道」というような、とにかく、芦屋川カレッジの中に、そういう自発的な雰囲気がぐっと盛り上がってきて、みんなで労苦を惜みず参加しました。最近は、そういう物がないような気がします。

(西本委員)

22 年、今年を受講生です。団塊の世代がどうかという話がありましたが、高齢者大学という名前に、まず、抵抗があります。60 歳からの人たちは、私も含めてそうです。後期高齢者で、年代に区切られるのですが、高齢者大学という意識で、全く入っていません。ACとか芦屋川カレッジということで、比較的意識が高いです。比較的早い目にリタイヤなさった人が、放送大学に何年とか、カルチャーに 4 年とか、色々で、本当に、いっぱい渡り歩いておられるので、比較検討しておられるのも、実際であり、そのとおりだと思います。芦屋川カレッジに関しては、学ぶのは一年間ですが、夏休みがたっぷりありますし、週 1、月 4 回ということですし、深くということではなくて、いい話だけど、それでお仕舞いということで、学ぶ内容もなんとかならないかと考えます。2 年で短期大学といった形も考えられます。比較的楽な芦屋川大学になるのではないのでしょうか。長い方がよいという場合もあります。

同期会でいろいろ活躍しておられるということに期待して、皆さん入っておられるようです。それ

は、口コミの宣伝が行き届いているのですが、「いつみんな仲良くなれるの」と、話をしています。講義を受けて、その後、いろんな係りに分かれていますが、いろんなことがあるみたいです。十分時間のある人が来られているので、もう少し、親密度が覚えられるような講座や交流会を最初の方に入れてほしいと思います。顔見知りがなくに行っている者には、1時間30分は、ちょっとしんどいかなと思う面もあります。ちょっと慣れてくると夏休みで、忘れてしまいます。講座にきてくださる先生方は、今年で10何回目ですとおっしゃる先生もあり、上手に話をしてくださるのですが、その次というのが、何かあるといいなあと思います。遺言状の書き方とか、認知症の話とか、なかなか面白い話をしてくださるのですが、横のつながりを、いつ、どうやって埋めるのかと感じます。「卒業したら仲良しになるわよ」「そうなんや」と言いながら来ているのが実感です。だから、何を求めて来ているかということが、大切だと思います。

(川村委員長)

満足度がここまでで、その先がというのが、先ほどおっしゃっている、自分たちで調べて、行動を起こすというところでしょうか。

(西本委員)

自発的な行動を起こすというところまでチームワークができあがって行ってなくて、希薄な感じがします。

(信岡委員)

芦屋川カレッジは一年で終わってしまいますが、セカンドカレッジという延長戦がありました。それは、もちろん一年では物足りないから、次につなげて行こうという考え方があって、セカンドカレッジという延長戦の中でつながっていったのです。芦屋川カレッジと大学院という中で、大学院になると、一度切れる感じがします。大学院生が同じような同期会を結成しているわけでもないし、個人個人にかえると、もとの同期会の方に帰還してしまうような感じです。大学院そのものでは、一年間授業を受けたとしても、結束力はほとんどないという不満な感じがするというのが、大学院を受けられた人々の意見です。さりとて、大学院で同期会のような物を結成するほどの人数も迫力もありません。

(川村委員長)

芦屋川カレッジを一年終えて、公民館としてはセカンドカレッジはないけれども大学院を置いているのですね。

(中西主事)

他の市だったら、公民館専用の施設があるのですが、芦屋市は市民センター401室を使っています。一番大きな部屋ですし、2年間、その部屋をカレッジで使いますと、水曜日木曜日市民の方の使いたいという要望に添えないこととなります。だから、とりあえず、一年で切り上げて、次の作戦で大学院にしているのです。市民の方の意見が大事ですから、市民の方に入ってもらって、一緒に、大学院がいいのか、セカンドカレッジがいいのか、仲間づくりができるのがいいのか、単に聞くだけでいいのか、その辺を、また、来年、つくる前に、実行委員会でも開いて、考えていきたいと思っています。

(川村委員長)

確かに、60歳代の方と70歳代の方と、考え方が違っていると、あっちこっちで聞いています。

(藤田委員)

わたしの母が、カレッジを卒業したとき、セカンドカレッジなんかを楽しみにしていましたが、カレッジになってしまうと、自分が、また、どこかで還元しないといけない、自分たちで何かをということに、重く負担に考えてしまって、皆さんより、だいぶ年上で入った者は(私の母なので、皆さんより随分年上です。),「私たちのような年寄りも、もう、行けない」と、まず、言いました。セカンドカレッジでは、自分の行ける範囲でだけ参加させていただけると思っていたのですが、一年間きちんとカリキュラムがあって、そこで、勉強したことをどこかで還元していかなければいけないということが、とても負担になってしまったようです。60歳のカレッジの生徒と家の母のように70歳を過ぎた生徒では、すごく違うのですが、母の友達の話などを聞いていると、勉強はしていきたい、だけど、したことを還元したり、子どもたちとどうこうしたりという程の元気はない。でも、時間はたくさんあまっているし、歩

いてここまで来れるので、できれば、つなげて行きたいと考えている人もいるということを知ってほしいです。あまりにもカレッジが立派で、「でも、わたしには無理だわ」という声も聞こえて来ましたので、だんだん減っているという中で、どこか無理があるかないか、考えてほしいです。

(中西主事)

昔は、大学行きたいけど行けないとか、中学校で卒業して働くとか、そういう方が多かったです。それだったら、子どもの遊びかもしれませんが、大学院に行ってもらって、大学院で身分証明を発行して、大学院修了したという形でできないかなと考えます。阪神間では、4年制で、1年目・2年目は講義ですが、3年目・4年目はグループに分けて、地域で何ができるか、地域に還元してという形が多いですが、気楽に聞きたい方と、あまり上から荷物をかけるとプレッシャーでしんどい方があります。学友会の会長がおっしゃったように、「お地蔵さん」のように誰かが上手に仕掛けて、話を聞くだけでいいんだけど、何かしませんかということで、結果的に終わってみると、冊子ができていたとか、自分の好きな散歩道ができていたとか、そういう仕掛けができると、気楽に聞いてもらう人は聞いてもらい、何かつくり上げたい人はつくり上げる、そして、市民に向かって発表する、新聞社に発表するなど、できたらいいと思います。

(信岡委員)

みんなで、ワイワイする「お神輿型」にするか、みんな同じ方向に漕いでいくという「ボート型」がいいのか、その辺があります。市民は「ボート型」にはなりたくない。「お神輿型」で、時には、ワイワイ言っている人がいてもいいというような感じで、「お神輿型」できた人たちが、何か「ボート型」のような、一つの方向に向けさせられることには、抵抗感があるのかなという感じはします。その点、同期会は「お神輿型」です。修了するときに、必ず同期会の結成ということ、わたしたちも指導していますが、なぜか盛り上がってきて、この一年間の絆をつないでいこうというような機運が盛り上がってきます。これは、西宮市や尼崎市からみると、ものすごく羨ましいことです。つながりが永遠に続いているのです。25年も続いています、実際はまだ、一期生の方が学友会に2人いらっしゃるのです。当時60歳だったら、現在85歳です。そういう人たちに、「ボート型」の運営は向きません。「お神輿型」で、言う人もいれば、囃し立てている人もいる、何も担ぎ手にならなくてもいいんだという雰囲気があるから、つながってくるんだと思います。

(西本委員)

最初にアンケートがあって、なにかやりたいことはありますか。こんなクラブができています。卒業した暁には、学友会に入ってこういうところに散らばってください。それって、やりたくないけど、と思う人もいますので、何か難しいですね。

(信岡委員)

それでは、「ボート型」になってしまう感じがします。同期会というのが母体になっていて、縦のつながりといっても、「お神輿型」で考えていますので、みんなで担いでいるのです。中には、囃し立てているだけの人がいてもかまわないという自由さがあります。だから、制約を感じる人がいるというのは、「ボート型」的なものに、誤解されている人がいるのかもしれない。

(西本委員)

情報がいろいろで、「入らないといけなの」とか「後は、楽しいのよ」とかにみんなつられて、お友達関係をどうつくろうとか、必死に構えているのだけど、後の継続の力がいますね。

(信岡委員)

後、どうするかというのは、同期会の持っていくかただと思います。自由に任されているのです。最近の60歳代の方は、まだ、会社につながっていらっしゃる。完全に自由ではないです。だから、同期会の中で、いろんな役割をするときも、わたしは、まだ、制約があるのでできなという人が、かなりいるとも、聞いています。

(小柴委員)

年齢が高くて、勤労意欲を持っている人が多いので、応募人数が減るのかとも思います。カリキュラムの再検討という声もでていっているのですが、社会の60歳代の勤労意欲をもって現役で働いていらっしゃる人が多くなるので、勉強意欲をもっている方がたくさんいらっしゃるけれども、時間が取れないので、人数が集まらないというのがあるのではないですか。イギリスは65歳が定年とか、だ

んだん、定年の年齢が上がってきています。

(信岡委員)

毎年、ビアパーティーのようなものを開いています。テーブルを同期ごとにしていたのですが、今年は初めて、地域別にテーブルを決めました。学友会ニュースを、全員に宅配していますが、全員に宅配するという強力なネットワークは、他の地域にはありません。芦屋には、そういう組織はできあがっています。けれども、「家に学友会ニュースを届けてくれている人は、どなただろうか」と知らないまま、或いは、「学友会ニュースを、郵便受けに入れてくれているが、どんな人が入れてくれているのだろう」と分からないままでした。それを、今度のビアパーティーでは、テーブルを地域ごとにすることによって、見えるようにしました。各テーブル毎に、「あなたですか、いつも、お世話になっています」という挨拶が交わされていたり、「あなたに、私は、配っていたのですか」という認識が生まれたり、非常に好評でした。芦屋は狭いところですから、隣同士の顔見知りというのは、あった方がいいという感じをみなさん持っています。ビアパーティーをやってみて、25年目にして、初めて得た成果でした。高く評価しています。

(河村委員長)

地域の人が混ざって、「こんなんだよ」と分かっていく、その地域を広げていく、という感じですね。

(信岡委員)

目的は、ビアパーティーなので、初めは、地域別のテーブルですが、後で、同期会の人たちが集まったり、いろんなグループが集まったりしていました。

(河村委員長)

魅力のある取り組みですね。

(信岡委員)

全員がネットワークでつながっているという組織は芦屋だけです。そのネットワークも5、6人とか、配達する人たちも小さく分けて、十数軒、二十軒というような担当地域を持っています。いろいろな連絡も、ネットワークを通じて、満遍なく行き渡っています。そういう組織ができあがったのは、10年ぐらいになります。同期会も、恐らく、同期会を結成するときには、そういう地域別の把握を統一しています。そうすると、「あなたも、芦屋川カレッジの人でしたか」というような認識が、お互いに生まれ、道ですれ違っても、お互いに会釈するというような現実が生まれています。

(西本委員)

名簿は名前だけでした。やっと、連絡先の電話番号だけは、資料としてではなく、皆さんに配布することになりました。学校でもそうですが、住所などの個人情報は一切出ない状況の中での、先ほどのネットワークづくりは、大人の、しかも、シニアの人たちが中心になっていて、掛替えのないいい物だと思います。

(信岡委員)

プライバシーとか個人情報とか言われてきたのは、最近です。同じ高齢者でも、認識が変わってきたなということ、思い知らされています。ある面、私たちは無防備だったかもしれないけれども、入学したときから、住所・氏名は、一覧表に刷って、出席簿にも同じものを使うというときがありました。プライバシーなんて認識がなかった。最近、そういう意見を言う人が多いです。

(西本委員)

芦屋なんかは、まだ、少ないですが、県へいくとピシッとしています。特に、若い人は、そのような意識の人が多いです。

(信岡委員)

芦屋市に社会教育登録団体というのがありますが、そこに登録しておく、市の教育施設が使いやすくなります。登録団体に希望していながら、住所・氏名は明かさない。或いは、登録団体にするには、芦屋市在住の人は何人とか、活動内容はどうかというものを報告しなければなりません。ここでも、名簿の提出を拒むという登録団体があります。だから、今、芦屋市の社会教育登録団体は400メンバーがありますが、中に、会長も所在地も分からない、明かしたくないというのがあって、管理が難しくなっています。

(河村委員長)

最近、富に、そういう条件が出てきています。そのような中でのネットワークができてきているというのは、すごく魅力的です。

(笠原委員)

カレッジも大学院も、私は目にすることがないので、意見になるかどうかどうか分かりませんが、20年度と21年度と人数が違っているのは、理由ははっきりしているのですね。

(中西主事)

大学院は20年度から事業が始まりました。20年度は、期待が大きかったのです。しかし、少し期待はずれのところがあったようです。カレッジの特効薬は、27期生の竹本先生や西本委員にカレッジの楽しいことを、ロコミで発進してもらえないと思っています。

(笠原委員)

参加しようとする、誰かにロコミで聞きます。自分で、何も情報無しで、ぼんたくることはありません。

(西本委員)

募集要項に卒業生のコメントがあればいいと思います。前年度はこんなことをしましたとか、或いは、もっと上の人の体験談などがあるといいのではないのでしょうか。

(中西主事)

入る限りは、皆さんも一年間の心構えが重要です。カレッジを卒業した人の声が大事ですから、例えば、聞くだけでの大学でいいのか、もっと、何かをしたいという人がいれば、それに対応する大学であればいいのか、テーマだって、どんなテーマを掘り下げるといいのか、入っている人と一緒に考えて工夫していくしかないと考えます。市民の声には、「もう、やめたらいいのではないか」という意見や「もっと、転回して、違う形の方がいいのではないか」という声も、起こってくると思います。

形は気楽に参加できるが、したい人は強制せずに何かできる、そのようなことを、一緒に入ってもらって作戦を考えていきたいです。

もう一つ気になっているのが、幼児教育講座です。2年間全滅でした。幼児教育講座は、幼稚園に出かけていく講座もあります。幼稚園でも様々な講座がされています。お母さんも忙しいことは確かですが、そんなところから、もう少し聞きたいテーマや深みのあるテーマであるのがいいのか、河村委員長、皆さんのご意見を求めてください。

(川村委員長)

若いお母さんたちは、勉強はしていらっしゃる。理屈は分かるというお母さんが多いので、話だけというのは、なかなか難しいです。実際に、最初の子育てでは、細かいことは、若いお母さんたちは、確かに分かりません。湯冷ましひとつ「どこで買うのか」ということになってきてはいるのですが、学齢期になると、自分たち、家族の思いやおじいさん、おばあさんの考えや意見があって、話を聞きたいという要望が少なくなっているのを感じ取っています。子どもを遊ばせる教室は、集まって困るほど集まっています。今年も子ども向けの教室を開き、10人ぐらいのスタッフでしましたが、「今のお母さんは違うね」というのを全員が言っていました。子どもを自分から離れたとたん見てないのです。自分の子どもが団体の中でどういう行動をするか見てほしいという思いがあるので、親を引き込もうとするのですが、なかなか、うまくいきません。「作って遊ぼう」ですので、「子どもがいろいろ考えて作る」「考えて遊ぶ」という願いがあるのですが、お母さんは、「教えてやってください。遊ばせません」と言われてしまいます。教えてまで遊ぶ道具ではない、自分で感じてほしいというのがあるので、「ほら、向こうの子は、手で押さえるのを足で押さえてポンとしているよ。あんなのは、考えてやっていいのよ」みたいなことを、親に聞こえるように言ったりします。それが、親に向けての効果で、子どもは子どもで遊ぶしかしかたがないのかなというのが、今年の教室から感じました。だから、「お母さんだけ勉強しましょう」というのも、なかなか、難しいことになって来ているのは、確かです。でも、このままではいけないのも、確かなような気がします。

(西本委員)

夏のおもちゃづくりのとき、「親子で作って遊びましょう」としました。親が口を出す、子どもに教えるじゃなくて、一緒に考えながら親と子でつくる、「お絵描きはこうよ」というのでなく、「一緒に考えな

がら科学しよう」とすると、面白いでした。親だけでなく、子だけでなく、親子一緒にして遊びながら話を聞く。それでないと、若いお母さんは面白くないのです。

(笠原委員)

幼児教育講座は、年間、この時期しかないのですね。恐らく、良さが伝わりにくいということがありますね。更に、公民館に来ないと、これに参加しにくいということがあるので、マイナス条件が出ているような気がします。本校、朝日ヶ丘小学校ですが、保護者の子育ての関心度から言うと、結構、あります。だけど、スクールカウンセラーが山手中学校に居るとき、本校の保護者は山手中学校に行って相談することができるのですが、そこまでは、ほとんど行きません。遠いのです。気軽に保護者が来られるのは、本校にスクールカウンセラーが、たまたま、県がお金を出してくれていたときです。そんな感じかなと、見させていただきました。一番いいのは、参加しやすい形をつくってあげるのが、いいのでしょうか。

(河村委員長)

幼稚園へ出かける講座は、参加者が多いのですね。

(中西主事)

子どもが幼稚園にいる間に、その幼稚園の遊戯室での講座なので、ほとんどの方が参加しています。しかも、園長とPTAと公民館が協力して、更に、PTAがこのような講師を呼んでほしいという講師を設定しています。初め思っていたのは、もっともっと勉強したい人が多い、子育てに悩んでいる人がいる、その道のすごい先生に話を聞きたいと思う人がいると考えて幼児教育講座ということで設けていました。参加者が少ないのは、テーマが問題なのか、講師の問題なのか、発想自体が時代の流れから離れてきているのか、対象者の方が市民センターにわざわざくるのが難しいのか、などと考えています。

(笠原委員)

子育ての知識をかなり保護者は持っています。高いと考えられます。だから、更に、足を運んで学ぼうという保護者は、かなりレベルが高いと考えられます。高いが、機会があれば話を聞きたいという方も多いと思います。

(小柴委員)

テーマ性のようなもの、重要なテーマを持った企画や新鮮さが必要かと思います。今年、神戸新聞にでていましたが、育メン、子育てパパ、あの先生の講演で、西宮では 500 人集まったと聞いています。若いママが若いパパと子育てを楽しむスキルというか、そういう新鮮なテーマも切り口として面白いかと思います。名前は出てこないが、神戸の元保育士の方で、神戸新聞に育メンということでシリーズでていたのもありました。ヤングママが、喜んでヤングパパと一緒に講演を聞きに出かけたということもありますので、そのような新鮮さも考えてみてはどうでしょう。

(河村委員長)

仕事を持っているお母さんたちもふえたので、曜日設定も大切かもしれません。

(小柴委員)

仕事を持っているので、出づらいという話も聞きます。一週間毎に 3 回続けてというのも、来づらいかもしれません。土・日でもよいかもしれません。お仕事を持っているお母さんも、無関心ではなく、非常に関心があると思います。

(中西主事)

教育問題は大事ですから、違う発想でチャレンジしていきたいです。

<秋の公民館講座についての説明>

(河村委員長)

今、いいなあと思いながら聞いていましたが、何かご意見はありませんか。

(小柴委員)

皆さん、あちらこちらの会に参加されるのがお忙しいので、優先順位をつけて考えられるので、早いアピールが必要だと思います。また、キャッチコピーも必要だと思います。

たくさんの参加人数があるということ、シリーズで続くということは、その先生と内容がいいということなのでしょうね。

シリーズでたくさんの人を集めている公開講座があるということは、すごいなあと思っています。

後、受益者負担がかなり公民館講座に入ってきているのですが、それは、受益者負担をしてもみなさんが、集まるということは、今の時代だからだと、わたしも考えています。公民館講座がワンコインではなくて、質の高い、人数に応じられるものに対しての、受益者負担というのはしかたがないと思います。ひと昔前の公民館講座といたら、無料でしたが、受益者負担は今の時代にマッチしている感覚だなと思っています。

(河村委員長)

「世界はニュースだけでは分からない」、これは、ずっといけますね。

(小柴委員)

わたしも、これ、受けたいぐらいです。これは、キャッチコピーがいいですよ。

(中西主事)

他市では、高齢者大学とかありますが、その名前は嫌われる人が多いですね。講座の銘々も大切です。

(西本委員)

AC大学と書いてあると、おしゃれじゃないですか。ちょっと、そういうところで、見栄を張ろうかなと思っています。同じような年代の人が、時間があって、興味のあるところでは、どんどん受講されている。その年代が高くなると、新しいネットワークができるとか、友達ができるとか、家庭内では、一切、しゃべることがない、話題がないということなので、こういうとこに来て、新しい友達ができるというのは、自分が、生涯現役でありたいと願ったりすることなので、継続性を持たせることは大切です。

(信岡委員)

学友会は、年会費 2,000 円。講演会を何回かと音楽会もしています。年会費を払うと、その範囲内で全部聞きに行けます。一番、困っているのは、謝礼が年々高くなっていることです。我々は、どんな有名な先生でも、3 万円しか払いません。3 万円で来てくれるというのは、向こうは、ボランティアです。芦屋川カレッジが案外名が売れているので、芦屋川カレッジだったら話に行こうかと来てくださる。オーケストラを呼ぶことがあり、40 人 50 人と来てくださるのに、5 万円をお願いすることもあります。講師探しは、人と人とのつながり、個人的なつながりに頼っています。人脈がたよりです。

(河村委員長)

NHKの公開講座も、ふたつ、傾向が違っていいですね。

(西本委員)

芦屋の公民館の講座は、他の市に比べると、なかなか評価がいいようです。

(河村委員長)

その他の方にいきたいと思います。

< 浅野公民館長 大規模改修工事・指定管理者制度について報告 >

(河村委員長)

県でどこか、指定管理になっているところありますか。

(浅野公民館長)

県では、まだ、聞いていません。阪神間も話にあがっているところはありますが導入しているところはあります。振興財団のあるところが受けてしているところがあります。

(河村委員長)

方向性もまだ決まっていませんか。

(浅野公民館長)

そうですね。市は指定管理という思いがあります。指定管理をするためには、この施設状況ではだめだということで、大規模改修を行いました。

(河村委員長)

指定管理になると、カレッジのカリキュラムにしても、とても、危機感を感じます。営業目的で、今まで大事にしてきたのがなくなるのではないかという不安感があります。

(藤田委員)

ルナホールの使い方も、外国から合唱団の方を呼ぶときも、振興財団のあるときとは、今、全く違いますので、芦屋市の財政のことを考えると不安なこともあります、よく考えてほしいです。

(浅野公民館長)

社会教育主事を置きなさいという法令がありますが、その資格を持っている人も少なくなり、市としての人事配置にも手薄になってくることもあります。すると、講座のレベルも下がってくると思われるので、そのような点からも考えないといけないと思います。

(信岡委員)

管理する側が収益を第一に考えた場合は、質を落とすという方向にしわ寄せがきます。図書館のときも、指定管理者の話がでたけれども、図書館を指定管理者に任せるのは、馴染まないという結果になりました。何で収益を上げるかという、本の購入の質を落としたりするしかない、そういうことにしわ寄せがいくと「たまんわ」という声の方が強まったのです。公民館とルナホールの経営、このあたりの兼ね合いが難しいです。

(浅野公民館長)

カルチャーセンターは、民間にあるので、そのようなところのノウハウは大きなものがあります。そういうところを見極めていく必要があるのです。平和・人権など市としてやらないといけないことは、絶対にしてくださいということは伝えます。講座の受講料に関してはここまででお願いしますよと、しっかりとできれば、逆に、職員が厳しい状態でやっていくよりは、よいふうに戻るかもしれないというところもあります。模索していきたいと考えています。方向性を出すということなので、よく考えて、どちらにするか、方向性を出したいです。

(河村委員長)

始まってしまうと、また、後ではどうにもならないということもありますので、市民もなかなか興味のあることです。しっかりと考えてほしいです。

(藤田委員)

福祉会館の後は、みんなで使える場所だと期待していましたが、来年の3月まで待つということですが、4月以降の概略をもう少し具体的に、場所の希望とか、相談に乗ってほしいです。音楽室の取り合いをよくするのですが、もう一カ所お部屋があるとありがたいと思っています。

芦屋には、30近い合唱団があります。みんな、小学校や幼稚園を借りています。だから、部屋がほしいのです。4月からといっても、補修や改善があるだろうから、4月からは無理だと思いますが、いかがですか。

(浅野公民館長)

みどり地域生活支援センターで使っていますので、補修や改修が必要です。昨年、改修工事のとき事務室として使っていた部屋は、多目的室として貸し出す予定で、合唱などにも使えると考えています。

(中西主事)

次回、第2回公民館運営審議会ですが、2月17日(木)に開催したいと考えます。秋の講座の結果報告や次年度の春の講座についてのご検討をお願いいたします。

(河村委員長)

これで、予定していた議題はすべて終了しました。ありがとうございます。

< 閉 会 >

次回開催日時

平成23年2月17日(木)午後2時～